

日時：平成28年11月20日(日)14：10～17：20  
場所：多摩市役所 西会議室

基本構想原案の印象、全体の構成について

○事務局案の思想について感じられるものは、今、住民のニーズに対応しきれなくなりつつあって、図書館機能を充実するためにより新しい形で変革し、NT地域の新しいまちづくりに貢献するという文脈。その視座は図書館や市役所の中だ。

○新しい時代、激しい時代の変動のある中では、視座をいったん図書館から離れて、市全体を見渡せる鳥瞰図を描くような考え方の変革が要る。

○文化行政として求められるのは、時代の変化を見つづ30年後に対応しきれるかということだろう。今考えられている図書館が対応しきれるか。

○図書館として施設があって、いままでのような資料提供中心のサービスをしていることと違う発想をしなければならぬ。

○図書館という言葉も使わずそれに縛られないで、これからの文化行政を考えたい。多摩NT地域・多摩市全体の再生に新しいスタイルを探して行けないか。

○全国の自治体になかったような人口10～20万人の地域の文化行政の新しい形として「知の地域づくり」を考えたい。

○「知の地域づくり」というのは知識・情報だけではなく文化全体を示す「知」というものを意味する。図書館のなかでロックバンド演奏が行われるようなスペースを提供することも考えられる。しかし、今の図書館を考えるとそのような情景はない。

○視座を図書館に置いて「図書館」をどうするという発想ではなくて、視座を中空に置いて、若者・子育て世代が高齢化しても豊かな人生を全うできる地域になるか、そういう視点で文化をとらえてみる。その中に図書館という機能を位置づけてみると、従来からあるものとは全く別の機能を要求される。

○将来どんな文化センターがあったらよいか。まずは「図書館」という呪縛から離れて「知の地域創造センター」のようなものを考えてみる、その中の施設のひとつに図書館があり新しい機能を持っている。そういう発想で、この基本構想の全体像を明記する。

○いまの基本構想案は、あくまでも「図書館」という枠組みを引きずりながら、その機能を豊かに広げていこうということ。まち全体の中でそれをどう位置づけるかという視点とは違う。

○今なぜ図書館を議論しているのか、それをこの国の人々の価値観や文化状況の変化のなかでもう一度根本から考えてみようという発想で取り組みたい。

○この地域に住む人の心が豊かになるような、文化活動が盛んになるような拠点になること。

○日本で初めての、自治体のつくる地域文化拠点でまちづくりにつながるようなもの、それが「知の地域づくり」。大胆な発想が必要。

○30年後の「知の創造センター」そういうところをまず最初の段階のところに出された上で、いままで詰めてきた問題に個々にもう少し詰めなくてはならないところを話し合っていくという順序ではないか。

○今の問題提起は、それぞれの歩んできた道から発想をふくらませることも大切かと思うが、直接的には、今日は細かい点についても相当詰めなくてはならないところを話し合っていくという順序ではないか。

○図書館法、図書館(矢祭町)の命名に結構うるさい。大事なことは住民の情熱や善意であり、必死に本を求めるニーズだ。

○多摩市中央図書館の場合、最初に図書館という名前をとりあえずはまず、知の地域再生の先端だという意識で多様な機能を考えて、その中に図書館という機能もあるので命名として建物に中央図書館とつけるのは構わないが、大きな見出しとしてあるいは看板として「知の地域創造センター」でよい。

○別の施設にも「知の地域創造センター」とあり副題のように施設の名前がある、そういう統合性をつくっていくのもおもしろい。そうしないと発想がやわらかくならない。

○図書館にこだわらず頭をやわらかく考えましょう、には賛成だが、イメージが行きすぎると心配だ。文庫活動の経験からみると人間の発達にはパランスよく発達するためには積み重ねが必要。図書館がもってきた機能は普遍的で、子どもの言葉の発達や成長過程にとって大切な場所だ。

○多摩市は永く中央図書館ができず、地域図書館や拠点館で利用を広げてきたが、中央図書館ができてやっと図書館システムが完成する。図書館として確実な歩みをするのが大事なことで、その上で周辺に新しい提案があるというのは賛成だ。

○3段階のフェーズがある。第1は従来型で、子どもたちの絵本、学生の学習室、小説の貸出が多いなど。それをどう打ち破るか議論してきた。多様なメディアや新しいサービス、ビジネス支援やSNSを取り入れることは個別の図書館ですで行われている。歴史的にもパピルスや粘土板が最先端のところでも、図書館は常に最先端のメディアをとりいれてきた。第1フェーズの古い図書館、そのイメージを皆さんが勝手に持っている。

○第2フェーズは30～40年前からの新しい図書館。ここから先はAIをどう使うかというレベルになる。

○第3フェーズが、図書館がどうあるか、市民がどうあるかということを含めて全体を見ようということ。図書館がどこまでできるかということではなくて、30年後の多摩市がどうあるか、予算・人・建物・メディア・情報・知識を再構築すべきではないか。アプローチの方向が違うと言われたのか。

○多摩市が図書館をつくってきた積み重ねの大切さを確認した上で新しい図書館をつくる、ことを基本構想には書きたい。

○見出しが付くような要素を打ち出せないといけない。「知の地域創造センター」とするならばその中の図書館はどういう機能をもつかまとめるべきだ。

○この委員会の議論も地域図書館からはじまっていて、順番が違うのではないか。まず中央図書館にどんな機能があるかだ。

○「知の地域創造センター」については議論が少ないので委員の意見をひとつひとつ確認して盛り込まないとならない。

○学習指導要領の改正では、知識と経験は大切だが、学校教育では「知的創造のできる子ども」を育てようとしている。子ども達に期待する力は、社会で起きている「高齢化/人工知能/介護離職」など問題にどのような行動がとれるか。

○図書館は中央図書館だけではなくシステムで市全体に広がっていて、多摩市は日本の図書館の先頭を走ってきたが、なぜこのような構想を始めたのか、ただ新本館をつくれればよいという基本構想ではない、というようなことを序章に書くのか。

○いままで委員から様々な意見が出た。読んでなんとなく方向性がわかるものになればよい。中央公園と一体化した図書館、お年寄りを大切にする図書館、漫画やDVDなど。30年後に通用するかの検討は必要だし具体化は今後の計画になろう。若者を引きつける図書館、働いている人に役立つ図書館、障がいを持つかたをどう迎えるかという意見もあった。人に優しい図書館など、議論されたことを拾い上げ、方向性がわかるように盛り込んでいけばよい。なぜ中央図書館が必要か、という議論に戻らないように。

あたらしい図書館を超えたサービスについて

○最近の本、A・アンヨリ氏『拝啓 市長さま、こんな図書館をつくりましょう』というものがある。その中で今までの図書館とはずいぶん違う機能をもった図書館が提起されている。基本的な機能である資料提供・レファレンスはあるが、ボードゲームや家族対抗でテレビゲームができるスペースもある。HOMAGOやYOUmediaと呼ばれる若者向けのデジタル環境、音楽・映像を作る施設が図書館にできている。情報を得るところとすこし違った形になって「知を創造」し、地域のコミュニケーションを促進するよう使われる。いままでの図書館という既成概念を取り払い考えていくというのはよいと思う。

○読み聞かせの会の活動対象も、子どもだけでなく障がい者・発達障がい者・触覚障がい者へと輪を広げたい。ボランティアをされている方も幅を広げた活動を想定して知の創造センターのイメージを広げてほしい。

○子どもへのサービスを大切にすることは、多摩市に図書館ができてから一貫して掲げられている。今まで同じことをやってきたわけではなく、サービスも変化しながら少しずつ積み重ねられている。そういうことを基本構想に書いておきたい。

○たとえば声をだしてしまう障がいを持っている人が、気兼ねなく参加できる施設やイベントがあってもよい。図書館であれば多少賑やかでも良い。パルテノン多摩では演目によって賑やかでもよいはずで、座席は肘掛けをなくして寝転がれるよう対応しようと提案した。

○DVDやブルーレイの貸出、多摩市にゆかりの作品やロケ場で図書館になかったアイデアを入れられればと思う。

○図書館というイメージであきらめていることがある。賑やかな図書館でもよい。そういったイメージの払拭といったことを言われたのではないかと思う。

○子どもへのサービス、機能はいちばん大切なものだ。絵本図書館の独立、読み聞かせスペース、おはなし会のホール、食育スペース。子どもの心の成長のためにどうあるか、という視点で施設を考えたい。中央公園から硝子張りで見える独立した児童書スペースを。

各章の個別の書き方、文章について

○図書館は地域文化活動に大きな役割を果たしている。それを實現する開かれた図書館、建物の中だけで活動しているのではない、地域に密着して文化の一翼を担っているということ序章に書けばよい。

○これからの多摩市の政策はこうあってほしい、市民が文化的に豊かな生活を送れるように市の政策はそれに対応して市の中心部に知の地域づくりを考えるべきだ。その核となるのは「知の地域創造センター」で図書館だけでなく中央公園や周辺施設も含むが、図書館は大きな役割を果たす。そういうことを序章に書くのか。

○原案の第1章はいらないと思う。現状・課題・経緯ではなくて、第1章にどんな図書館をつくるかを書かないとならない。インパクトのあるもの、世界初の図書館をつくらうという意気込みがあるなら、驚かれるような機能を盛り込みたい。

○第1章：現状が細かく書いてあるが、こんなことは書かなくてもよい。なぜこんなことが書いてあるのか。サービスをやっていても課題があって、だから中央図書館は機能達成をしなければいかんという表現である。まさに視座が図書館の中にある書き方になってしまう。こんなものは、図書館は図書館でいままでもがんばってきただけで、これからは新しい広い枠組みで地域創造をイメージする。そういう文脈で一言あればよい。

○第2章1：図書館を充実させるため多摩市の再生に貢献は、図書館の中からもものを見ているという視点。これを逆転させるような文脈をつくることが大事。

○私が言ったのは第2章の頭書けというわけではなく、序章としてもよい。基本構想はビジョンを明確に示すことが大切。どういうものがほしいか、どういうものをつくるのか書く。そこに「知の地域創造」のために「知の地域創造」と図書館の未来像・将来像、キャッチフレーズのように書けばよい。第1章があってもよいが、ここまでを細かく書くのではなく、わかればよいという程度にしたい。第2章には「知の地域づくり」とは何か、より具体性をもって書く。どう生きるか、人生を豊かに心豊かままちづくり、といったことに具体的にどうアプローチが必要かということを書きたい。

○第3章に各論を書いて図書館の役割を明確にしてゆく。

○基本構想原案では、映像や劇画などの分野が重要視されていなくて、若者のニーズにこたえられるのか。

○第2章2-3：「再生まちづくりに役立つ」とある。そうではなくて図書館が果たす役割はまちづくり再生の本体で知の地域づくりの本体なのだ。そういう位置づけが、こういう細かい表現で直さなければならない。

○第2章では、最初にこれからの地域再生に必要なことはなにかということが書いてあり、序章に書いてあることを具体的に書いて、図書館の開かれた姿を書く。

○第3章3-1：「パルテノン多摩との連携も図りつつ」とあるが単なる連携でなく知の地域再生のセンターのひとつ。個別に図書館ができて連携するわけではない。

○「多摩市の文化・情報・教養活動の基地となる」とある。これは憲法前文のように掲げられるべきことだ。

○3-2：「開かれた中央図書館」は環境とつながるということではなく中央公園とつながるということでもなく、中央公園は図書館の立地なのですべて含まれている。

○3-4：「市民協働」とあるが協働は非常に大事な言葉。厳しい時代に役所をお願いするばかりではすまない。市民にまちをつくる・文化をつくるという主体的意識が必要で、扱いが小さい。

中央公園地域の全体ビジョンへの言及について

○まちの知の地域づくり創生を、多摩センターをモデル地区として考えるなら中央公園全体を考えたい。図書館はその一部。ライブハウスを図書館の中につくれないということであれば駅の近くにつくる、そこも「知の地域創造センター」の一つの運営機能と考える。

○図書館の周辺をどのようにするのも重要だ。市民の足が向くようにしかけを考えたい。

○緑陰読書や図書館に導くような環境づくり、地域のボランティアが道行きに花を植え、公園に遊びに来たカップルや親子連れが、カフェに寄るうちに図書館に足を伸ばすというような地域に溶け込んだものになればよい。離れて住んでいる人のアクセスにはミニバスが整備されるとよいだろう。

○パルテノン多摩近辺に植物園。埋蔵文化センターもベデデッキでつながる、これも知の拠点の一部だ。夏に駐車場でヤギとふれあひもできる。中央公園で野外美術館の展示、ベンチを増やしたりして、図書館だけでなく全部をつなげられる。

○「知の創造センター」の提案に賛成。パルテノン多摩の基本構想に関わっているが、まちづくりの方向性が一致している。今までの議論はこの街をどういう方向に持って行くか、30年後にどうなるか、若い世代に遺産・文化として残せるかという意識が欠如していた。

○都市計画的視点で、高齢化が進んで若い人を呼ぶ装置としてパルテノン多摩や図書館が役割を果たし、若い世代の人、学校教育、子育て世代に利用しやすい施設になるとよい。知的創造センターに加え具体性を持たせるため、子どもや若い世代のためのと付け加える。

○多摩センターには子育て世代が集まっている。日曜日の中央公園には若い人が溢れているが、周辺住宅地域まで足が向くように、集まっている人たちに子育て環境が良いことをもっとアピールできるようにしたい。

○めったにないような場所でパルテノン・中央公園・図書館が連携して計画がつけられれば多摩センター地区の発展にもつながる。「知の創造センター」という発想があるからこそできる計画ではないか。

○多摩センター全体を考えてというように議論の方向性が変わって来たように思う。パルテノン多摩の基本構想策定委員会や都市計画審議会では、図書館や多摩センター全体についてどのように議論されたか、うかがいたい。

○多摩センター全体のまちづくりに関しては、その時点では(提案と議論が)確立されていない。

○「知の地域創造センター」とはどのようなものか、図書館とはどのように違うか、

○「知の地域創造」ということを細かく規定せず、キャッチフレーズとして使えばよい。この地域が愛される街・心が豊かになる街・住みやすい街・若者が生活してよかったと思えるような街、そのために必要な条件は何だろうか。経済以外の文化活動・施設・環境・サービスなどを述べる、地域再生が浮かび上がってくる。

○この策定委員会では、新しい中央図書館をつくるのでその内容について議論してまとめる本館再構築基本構想をつくっている。その前段に政策として、多摩市の中心部に知の地域づくりが必要で、そのコアとなるのは「知の地域創造センター」になる、そのセンターは図書館だけでなく中央公園や周辺施設も含まれる、それらが繋がりがつつ多摩センターの街をつくっていく、その中心的な役割に図書館が関わっていく、ということが序章に述べられている。そういうことでよいか。

○よいと思う。それからこういうことを述べると「ではパルテノン多摩はどうなるのだ」などと考えると書き進まなくなると思うので、「知の地域創造センター」の要素になる、市民の立場でこうあったらよいというようなことを想像して書けばよい。